# 祈れなかった日々だった

水谷節子

角さんが洗礼を受けた。

彼は牧師の言葉に一つ一つ頷いている。脳梗塞で声を失い言葉が出ない。妻子と別れて障害者施設にいる。同じ寮生の桜さんが手渡してくれる聖書のみことばを通して、神に出会った。

彼の洗礼式に出席していて、角さんと同じ年頃で天に召された主人のことを思い出した。遺伝性ののう包腎からくる高血圧が一番の原因で脳溢血で、倒れた。私達はそのような遺伝子を知らなかった。四十二歳から十四年間の闘病生活を続けた。

私は町役場に勤めていた。毎日お昼時は食事の用意と様子をみるために家に帰った。主人は歩けない体で歩こうとして、倒れて血を流していることがあるので、私は部屋に入る前に玄関でまず、深呼吸をしてお腹に力を入れた。救急車を呼ばなければならない時もあった。

心底祈りに支えられていたと思う。しかし看病真っ直中の時には「主人をお癒しくださ

い」と祈れなかった。「神様。どうぞ助けてください」と毎日叫んでいた。後二年で、主人を看病していた年月と、天に召されてからの年月が同じになる。

最近私は主人との会話がなつかしい。同じお天気の話でも、夫婦の会話は何かが違う気がする。主人を見舞ってくれた友人が私に「あなたは誠さんの面倒を看ているつもりだけど、誠さんに支えられているのよ、あなたが」と言ったけれど、そうだったのかもしれない。

現在私は、新しいマンションで母と生活をしている。主人が入院するたびに、勤めている私の代わりに、昼間付き添ってくれた母も八十六歳。母と朝食の前に聖歌を歌い、祈りから一日が始まる。毎日が静かに流れていく。

今週の暗唱聖句『あなたがたの名が、天に書き記されていることを喜びなさい』（ルカ十・20）が、心の奥深く浸透していく。